怪露人

[illegible]

赤化宣傳の秘密文書を握る

孫逸仙一派も加はり

西伯利亞の東部に根據地

歐露過激派は世界を赤化せしむる目的を以て我國にも其魔手を延べんとし先づ

日本に

於ける社會主義の一派と氣脈を通じ漸次赤化運動に着手して居ることは此程東京に於て曉民會一派の檢擧并に怪英人グレーの渡來及び神戸水上署に於て逮捕した上海假政府の密使黄濱武等の

動靜に

依るも其事實は明かに證據立てられて居るが最近上海で我官憲の手には入つた秘密文書に據つて彼等過激派の日本に對する運動方法が明かになつたそれに據ると孫逸仙一派と支那に於ける朝鮮假政府及び過激派が三角同盟を組織して西伯利亞の東部に

根據地

を定め朝鮮及び日本内地に赤化宣傳を爲すべく秘密裡に然も極めて秩序的に計畫して居る加ふるに孫文が第一次革命當時日本に亡命して居た關係上神戸に多數の知己を有し又同縣の廣東人が神戸在住支那人約八分を占めて居るより此方面から赤化運動の烽火が揚がるかも知れぬと言ふので兵庫縣警察部は目下極力其方面を警戒すると共に西伯利亞方面上海方面より來る旅行者に對し嚴重警戒し居れり（神戸電話）

神戸港を足溜りに

過激主義の宣傳

孫逸仙と假政府と東露過激派

過激主義者の入國に對しては我が官憲は警戒を嚴にし既に怪英人グレーを入込ませた例もある事とて西伯利、朝鮮及び、上海方面よりの旅行者は内地寄港の際にも臨檢を怠らず最近神戸の官憲が上海より手に入れた或る密書に依つて上海に於ける一味の宣傳系統が略分明するに至つたこと即ち支那では南方に蟠居してゐる孫逸仙一派が自己の勢力を伸張すべく上海假政府と通じ同政府との間に孫文協約なる密約を結んだ、これと同時に孫逸仙の一派は東露過激派と上海假政府との中間に介立して一種の三角同盟を結び日本に對する同主義の宣傳に努めつゝある形跡が明らかとなつた、而も支那の第一次革命當時孫文の我國に亡命した縁故あり且つ神戸在住の支那人約四千名はその八分通りまで廣東出身者にて占められ孫逸仙一派に同情を表する者多き關係もあるので、神戸港は上海よりの宣傳者を迎ふる唯一の門戸、足溜の土地となつて來た事が明瞭になつた、されば兵庫縣外事課では新春と共に神戸港を中心として此の方面（主として支那人）に必死の警戒網を張るべく準備中であると

社會主義者

[illegible]を飲み直に物置き小屋にて縊死を遂げんとし隣人に發見されたが八日午前八時遂に死亡した、[illegible]はふじのの夫[illegible]が昨年死亡後[illegible]の結果だと（[illegible]田八日電話）

六名檢擧さる

年末の例會に

昨[illegible]三社會主義同盟本部に堺利彦氏始め佐竹太郎氏外[illegible]二十名の社會主義者集まり例會を開いて居たが、不穏の廉で八時半に麹町[illegible]警官に解散を命ぜられ警官に暴行を加へた、大多の者は直に檢束された

嘩を挑んで 自動車逃出す

昨夜午後五時四十分頃本郷區元町一丁目二番地先の坂を府下三河島[illegible]

資本主義の成熟と社會主義（中）

慶大教授 小泉信三

さて資本主義は其發達の頂點に達して崩壊するものとして、それは果して如何なる徑路を取つて行はれるものか。マルクスに從へば、資本主義は、現財産制度と、發達せる生産力その抵觸に基く必然避け難き恐慌の爲めに、その存續が不可能となると同時に、資本主義存立の要件たる賃銀勞働階級の、被搾取被抑壓の境遇を脱せんとする階級的闘爭に依つて倒さるべき筈である。即ち「共産黨宣言」の一節を引用すれば「ブルジョワジイが依つて以て封建制度を倒した武器（生産力）は、今やブルジョワジイ自身に向ふ。然し乍らブルジョワジイは己れに死を齎す武器を鍛えた許りでなく、又此武器を揮ふ人々、即ち近世勞働者、プロレタリエルをも造つた。」のである。姑く問題を二ツに分けて、先づ資本的社會は必至不可避の恐慌に依つて、謂はゞ自動的に倒壞すべきものであるか否かを考察するに、第一共産黨宣言發表の時以來今日に至るまでの事實は果して恐慌が益々激烈大規模となつて資本主義の存續が到底不可能となつたことを示して居るかと云ふに、吾々は何れかと云へば寧ろ反對の傾向を認めるもので、假令恐慌の來襲は全然之を豫防することが出來なくても、是に處して其勢を緩和する手段組織は十九世紀中葉に比して遙に發達して居ることは既に多くの學者の指摘して居る通りである。然らば理論上に於て生産過剩の必至不可避は充分證明せられて居るかと云ふに、二三の有力なる學者は決してその然らざるの理を明かにして居る。マルクスの資本主義は過剩生産、即ち生産せられた商品の販賣不可能に陷ることに由つて、結局行詰まる運命の下にあると云ふ學説は畢竟資本主義の下に於て偉大な發達を遂げる生産力は、直接間接に消費財生産の用に充てられるものとの前提を基礎として居る生産力の發達に依つて消費財生産額は非常に増加する、然るに社會の消費能力即ち消費物購買能力の増進は、それと歩を共にすることが出來ない、其處で必然生産過剩に陥らざるを得ないと云ふのである。稍々詳しく云へば消費財の販賣の能否は先づ勞働者及び資本家兩階級の購買能力に依つて制限せらるゝものであるが勞働者の購買能力は資本主義の下に於ける所得分配の理法に由つて甚しく局限せられて居ると同時に他方資本家の所得は勿論甚だ大ではあるが、その消費の用に充てらるゝ部分は蓄積の衝動即ち收め得たる餘剩價値の大なる部分を資本化して再び餘剩價値を生むの用具たらしめんとするの衝動に依つて甚だ制限せられざるを得ない。然るに斯く資本の蓄積の増進と共に益々速度を加へて行はるゝ生産力の發達は結局（マルクスに從へば）消費財生産額の大増加となつて現はれなければならぬものであるから資本主義の發達は是非とも過剩生産に導かざるを得ない。これが資本的生産方法に包藏せらるゝ内在的矛盾だと云ふのである。

併し乍ら此説は、生産は消費の爲めに行はれると云ふ、現在目前の事實とは一致せぬ假定の上に立つものである。今日の社會に於ては生産は決して消費の爲めには行はれない。生産は一に營利の手段として行はれるので、生産物が如何に人生の福祉に寄與するであらうかは、毫も生産企業家の顧みるところではない。營利の目的を達する爲めには何を生産すべきか。それは勿論需要のある商品でなければならぬが、併し需要は必ずしも、消費の爲めに支出せらるゝ所得部分のみに由つて定まるもので